

感染防止対
策を

新生活様式

会話は可能なかぎり真正面を避ける

家に帰ったらまず手や顔を洗う

手洗いは30秒程

市原市 児相や警察に詳細伝えず

06月05日 17時11分

ことし1月、千葉県市原市のアパートで衰弱した生後10か月の女の子を放置したとして母親が逮捕された事件で、その後死亡した女の子について市が直接様子を確かめられない状況が9か月間にわたって続いていたことを、児童相談所や警察に伝えていなかったことが分かりました。

自称、住所不定、無職の小西理紗容疑者（23）は、ことし1月に生後10か月で亡くなった、次女の紗花ちゃんが衰弱していたにもかかわらず放置したとして、保護責任者遺棄の疑いで逮捕され、5日身柄を検察庁に送られました。

市原市によりますと紗花ちゃんは去年4月に保健師が自宅を訪問して面会して以降、乳幼児健診や予防接種を受けていなかったうえ、訪問しても直接、面会できない状況が続いていたということです。

市はことし1月、児童相談所や警察を交えた会議で「1度も予防接種を受けておらず、養育に心配がある」などと書類で報告したものの、去年4月を最後に9か月間にわたって直接様子を確かめていないことは伝えていなかったということです。

結局、児童相談所や警察は「緊急性が高くない」と判断したということで、市は緊急性の評価や他の機関への情報提供などに問題がなかったか検証することにしていきます。

去年1月、千葉県野田市で小学4年生だった栗原心愛さんが虐待を受けた末死亡した事件で、行政の対応を検証した日本大学の鈴木秀洋准教授は、関係機関の情報共有や連携が十分に行われておらず、野田市の事件の教訓が生かされていないと指摘しています。

鈴木准教授は児童相談所や警察など関係機関が参加した会議で、市が女の子と面会できていないことを伝えていなかったことについて、「関係者同士で必要な情報を共有すべき会議が形骸化して連携が取れておらず、役割分担ができていなかった」と、野田市の事件との共通点を指摘しました。

その上で、「市が緊急性の判断に必要な情報を共有していないことは問題だが、報告が不十分な場合には児童相談所などの関係機関がもっと介入して情報共有し、それぞれの機関に何ができるのか役割分担を明確にすべきだった」としています。

そして「今回の事件は野田の事件の教訓が全く生かされておらずつらく悲しい。各関係機関がひと事ではなく、管轄する自治体でも野田の事件と同じようなケースが起こる可能性があると考えて対応や検証に当たらなければ、子どもたちを守ることができない」と話しています。

シェアする ?



